

日本の城館（1）城館の歴史

令和2年(2020)11月17日(火) 12:00～14:00

於 茅ヶ崎公園体験学習センターうみかぜテラス 2F-1

お話し 山本俊雄会員

1 弥生時代 環濠集落

- ・竪穴式住居を空堀で囲み、要所に高い物見櫓を持つ。
- ・吉野ヶ里遺跡（佐賀県）・西方遺跡（茅ヶ崎市）など。

2 飛鳥時代末期 朝鮮式山城

- ・天智天皇2年（663）白村江の戦いで日本は敗戦、百済が滅亡しその遺民が日本に亡命帰化した結果、城の構造が変革した。
- ・太宰府（福岡県）を守る水城（みずき、土塁と水堀からなる城壁）。大野城、基肆城（きいじょう）など。

3 飛鳥時代末期から奈良・平安時代 都城（とじょう）と城柵（じょうさく）

- ・**都城**とは天皇が住まう都（みやこ）。城壁で囲まれた中国の長安・洛陽を模倣した都城だが、日本では高く堅固な羅城という城壁では囲まれず、軽微な囲みであった。
 - ・藤原京（橿原市）持統天皇8年（694）
 - ・平城京（奈良市）和銅3年（710）
- ・**城柵**とは新潟県から東北地方にかけて蝦夷征討と統治のための政庁。築地（ついで）や木柵を廻らし要所に物見櫓を建て武装化されていた。
 - ・停足柵（ぬたりのさく、新潟県北部）。7世紀半ばに設置された。
 - ・多賀城（宮城県多賀城市）天平宝字6年（762）の日付がある多賀城碑が残る。
 - ・秋田城（秋田市）天平5年（733）に出羽柵（でわのさく）を移し設置、平安時代まで東北経営の拠点となる。

4 中世（鎌倉・室町時代） 山城と居館（きょかん）

鎌倉時代末期から室町時代前期

- ・14世紀に国人（在地領主）や土豪が、有事に逃げ込む避難所として山頂部に山城を築いた。日常生活には不便なため平時には山麓や平地の居館に住んだ。居館は土塁や堀を廻らし武装化した住居で、屋形（館やかた）・館（たち）・土居（どい）などと称した。

室町時代後期

- ・16世紀になると山城が拡張され、居館を城内に移す例も現れた。当初は城の規模も小さく粗末なもので、険しい山頂や河岸の断崖など天然の要害が選ばれた。中世の城の数は居館も含めると日本の城館（城郭）の99%を占めると言われている。

- ・中世の山城は本丸と曲輪（くるわ）などからできている。本丸は山頂を切り開いて置かれ、そこから尾根伝いに順次平地を造り、曲輪とした。曲輪は段々畑状に幾つも連なっている。数は一つ二つもあるが通常は数十もあり、多いところは二百を超えたといわれる。各曲輪は著しく狭く 20～30 坪位が一般的だった。
- ・江戸時代の城のような石垣はほとんどなく、土塁の土留や虎口（こぐち。出入口）脇に作られた。
- ・堀は山上なので空堀とし、尾根を切断する堀切（ほりきり）や山の斜面を縦に区画する豎堀（たてぼり）が主で、近世城郭のような曲輪を取り巻く堀は少ない。
- ・天守はなく、櫓（やぐら）も未発達で、多くは掘立柱の小屋ぐらいであった。

5 近世の城郭

草創期 織田信長と豊臣秀吉の時代（織豊期）

- ・近世城郭を完成させた織田信長の安土城は、それ以前の東海・近畿地方での室町時代末期の戦乱が大きく影響している。濃尾平野では中世から極めて低い丘や平地に城が築かれており、それらが近世的な平山城（ひらやまじろ）や平城（ひらじろ）の基となった。
- ・清洲城（信長の初期の居城）。典型的な中世以来の平城であった。
- ・観音寺城（滋賀県安土町、六角氏が築いた）。中世山城に珍しい石垣を多用している。
- ・多聞城（奈良市、松永久秀、松永久通、塙直政の居城）。初めて多聞櫓が廻らされ、天守級の大櫓も建てられた。
- ・安土城。以上のような近世城郭要素を集大成して作られたのが信長の安土城であった。天正 4 年（1576）完成。中心部は総石垣造り、本丸には五重七階の天守を上げ城内には城主居館の御殿を建て、城下町も建設された。
- ・信長の後継者となり天下を統一した秀吉による天下普請で近世城郭は全国に普及する。
- ・秀吉の天下普請
 - 大坂城 天正 13 年（1585）五重七階の天守
 - 聚楽第 天正 14 年（1586）外観四層、文禄 4 年破壊
 - 伏見城 文禄 3 年（1594 指月、）慶長 2 年（1597 木幡山）五重七階の天守
 - 肥前名護屋城 文禄元年（1592）五重七階の天守
- ・秀吉の城を手本とした武将達の近世城郭
 - 天正 16 年（1588） 高松城（生駒親正）寛文 10 年（1670）三重四階の天守
 - 天正 17 年（1589） 広島城（毛利輝元）五重六階の天守、後福島正則、浅野長晟
 - 天正 18 年（1590） 岡山城（宇喜多秀家）五重六階の天守、後小早川秀秋、池田忠継
 - 天正 20 年（1592） 会津若松城（蒲生氏郷）七重⇒五重七階の天守、後上杉景勝、松平
- ・近世城郭の出現と共に中世山城に割拠していた家臣達は大名の居城に集住させられ、山城は次第に廃城となっていった。

慶長期の城郭

- ・慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いの結果、戦後処理により全国的な大名の配置換えが行われ、特に東軍側大名の大幅禄高加増が全国的な築城大盛況をもたらした。これは慶長 20 年（元和元年 1615）の大坂夏の陣で大坂城が落城、豊臣秀頼が滅びるまで続いた。
- ・同年、幕府が武家諸法度を公布し新規築城や城の増改築を禁止したことにより築城期は終わった。現在、全国の主要な都市に見られる近世城郭の姿はこの慶長期に造られた所が多い。
- ・慶長期には、石垣や天守の築城技術が進歩し、城の防備も飛躍的に高まった。
石垣：石垣面の反りや隅部の算木積みの完成し、打込はぎや切込はぎが一般化した。
天守：望楼型から層塔型に変わった。鉄砲狭間（さま）や石落としが設けられた。虎口（こぐち）と門：虎口の枳形が定型化し、外側に高麗門、内側に櫓門の厳重な構えが行われる。
- ・秀吉をまねた家康の天下普請により新技術が大名衆に伝わる。
伏見城：慶長 7 年（1602）より再建、五重七階の天守、大坂城再築により寛永元年破却。
彦根城：慶長 8 年（1603）より、三重三階の天守、井伊直継、京極氏大津城天守など移築。
江戸城：慶長 8 年（1603）より、五重七階の天守、天下普請は 9 年に発表。
駿府城：慶長 12 年（1607）より七重七階の天守、御殿風の華麗な建築様式。
丹波篠山城：慶長 14 年（1609）天守台のみ、大坂の豊臣氏と西国諸大名の押さえに。
丹波亀山城：慶長 14 年（1609）五重五階の天守、大坂の豊臣氏と西国諸大名の押さえに。
名古屋城：慶長 15 年（1610）より、五重六階の天守。
高田城：慶長 19 年（1614）三重櫓、堀と土塁のみの平城、松平忠輝、後稻葉、戸田、榊原。
- ・慶長期の外様大名による築城例
加藤清正（熊本城） 鍋島直茂（佐賀城） 黒田長政（福岡城） 細川忠興（小倉城）
加藤嘉明（松山城） 藤堂高虎（今治城、津城、伊賀上野城） 山内一豊（高知城）
毛利輝元（萩城） 堀尾吉晴（松江城） 森忠政（津山城） 池田輝政（姫路城）
伊達政宗（仙台城） 津軽信枚（弘前城）など

江戸時代の城郭

- ・慶長 20 年豊臣秀頼が滅ぶと、幕府は一国一城令と武家諸法度を公布して、諸大名の城に対して強い規制を加えるようになる。一国一城令は、各大名の持ち城を一つの居城だけに限り、その他の城を取り壊させるものであった。その結果、一部の近世城郭（岩国城や丸亀城）も廃城となったが、それまで支城として存続していた山城や中世城郭は全国から姿を消した。また近世城郭もその後は単なる修理

工事だけで明治維新を迎えている。しかし幕政の都合によっては新城の築城も許されている。

元和 4 年（1618）明石城：天守台のみ。西国の外様大名に対する押さえとして。

元和 8 年（1622）備後福山城；五重六階の天守。上に同じ。

寛永元年（1624）島原城：五重六階の天守、49 基の隅櫓。キリシタン政策として。

- ・幕府自体は徳川将軍家の権威の象徴として直轄の天下普請を行っている。
 - 寛永 15 年（1638）江戸城：五重六階の天守に拡張、元和 3 年（1617）より。
 - 慶長 11 年（1606）二条城：五重六階の天守に拡張、慶長 6 年（1601）より。
 - 寛永 6 年（1629）大坂城：五重六階の天守に再築、元和 6 年（1620）より。
- ・関東地方や東北地方の譜代大名や親藩の居城は元和・寛永期（1615～44）に大改修を行っている。
- ・外様大名が転封先で新規築城を許された例もある。
 - 寛永 9 年（1632）白河小峰城（福島県白河市）：三重三階の櫓 新築 丹羽長重
 - 寛文元年（1661）赤穂城：（兵庫県）天守なし 新築
 - 万治 3 年（1660）丸亀城（香川県）：三重三階の天守 再築 キリシタン蜂起に備えるために。
- ・幕末には外国船の来航が相次ぎ海防強化のために、幕命で築城された。
 - 嘉永 2 年（1849）福山城（北海道松前町）：三重三階の天守 安政元年（1854）
 - 文久 3 年（1863）石田城（長崎県福江市）：築城許可が下りたのは嘉永 2 年（1849）
- ・日米和親条約によって開港場となった函館に西洋式城塞を築城
 - 元治元年（1864）五稜郭（北海道函館）：「稜堡型」で櫓なし。安政 3 年（1856）より。

（上記は『城を知る事典』（日本通信教育連盟）から必要な部分を切り取って作りました。）

参考資料

- | | |
|------------------------|--------------|
| ・城を知る事典 | 日本通信教育連盟 |
| ・名城をゆくシリーズ | 小学館 |
| ・日本の城 完全ガイドシリーズ | 晋遊舎 |
| ・歴史人 No101 戦国の山城 大全 | KK ベストセラーズ |
| ・日本の城 DVD コレクション 1 姫路城 | デアゴスティーニジャパン |

日本の城館 (2) 城郭用語集

茅ヶ崎郷土会の令和 2 年度 第 298 回史跡文化財めぐり「小机城址から茅ヶ崎城址を巡る」の現地説明用に作成したのですが、同事業の実施を、コロナ禍のために見合わせたため、同年度の勉強会（茅・郷土会 Study Room）のレジュメとして使用したものです。

小机城址

小机城址他は室町時代の関東動乱時に築かれたもので、鎌倉公方四代足利持氏が関東管領上杉憲実を討とうとした永享の乱(1438~1439)の頃に山内上杉氏によって築かれたと言われますが詳しくは分かりません。ただ、史実では山内上杉氏の家宰をめぐる争った長尾景春の乱の時、景春の味方をした豊島氏が小机城を守り、乱を鎮めようとした太田道灌がそこを攻め、数々の逸話を残しています。

城郭用語

合坂(あいさか)：石段の様式。土手や石垣などの塁を上り下りする坂道や石段をV字型の向きに造っている。一つの場に集中するので戦時には混乱し易い。

重ね坂(かさねざか)：塁の側面に坂道や石段を設け、さらに平行に坂道や石段を造ったもの。武者走りの一種で合坂や雁木坂などがある。

雁木坂(がんぎざか)：塁が細長く伸びる方向に対して垂直に上り下りする坂や石段。櫓形門の渡櫓への通路としても使われる。江戸城清水門など。

的土(あづち)：虎口(こぐち。出入り口)の外側に土を盛るだけの簡単なものであったが、後に土塁や堀を備え、より防御力の高い「馬出(うまだし)」へと発展した。

安土馬出(あづちうまだし)：虎口の門の外に土塁や堀で一文字に造ったものを言う。

馬出(うまだし)：初期は虎口の前に一文字の土居を築いた簡単な安土馬出であったが、後に土塁や石垣造りの曲輪(くるわ)を半円形にした「丸馬出」、四角形にした「角馬出」、二つの虎口を直角にした囲いをもつ「辻馬出」などが作られた。さらに発展させ大きくして、城から独立して造られたのが「出丸」であり、大坂冬の陣で有名な真田丸もこの一つである。

堀：水を入れた水堀と土を掘っただけの空堀などがあり、横堀、竪堀、障子堀、畝堀などがある。特に後北条氏関連の城址には障子堀や畝堀を備えた空堀が多く見られる。山中城址など。

間詰石(あいづめいし)：石垣の表側で大きな石の隙間を埋める石。野面積みの石垣に多く用いられる。石垣の裏側で小さく砕いた石を敷き詰めているのを栗石(ぐりいし)と言う。

胴木(どうぎ)：石垣の最下部には根石という大石を敷くが、石垣の重さや地盤の弱さなどで沈下して他の石とのバランスが悪くなると石垣全体が崩壊する。この根石のバランスを保つためにその下に敷くのが胴木である。土や水による腐蝕に強い松の丸太が適している、良いものは数百年から千年も使い続けられると云う。

虎落(もがり)：空堀(からぼり)の底に用いる仕掛け。枝が付いたまま竹や、先を斜めに切って鋭くして空堀の底に上に向けて置く。竹は筋違いに組み合わせて根元を地面に埋め、竹同士を縄で結んで固定し柵や垣根のようにするのが一般的である。敵が空堀の底を通るのを防ぐ。

冠木門(かぶきもん)：屋根が付けられていない木の門。支柱の上に横木を渡しただけの簡単な門で中世までは多くがこの門であった。冠木とは二本の支柱の上に横向きに掛ける木材の事である。近世では櫓形門の一の門に採用される事もあった。櫓形門は四角形の扉で囲むように作る門で、二つの門を備えており一の門は外から最初にくぐる門で高麗門と云う建築様式が多かったので、高麗門の事を冠木門という事もあった。

高麗門 (こうらいもん) : 鏡柱と呼ばれる二本の本柱を立て、上に冠木を渡して切妻屋根を架けたもので、鏡柱の後方に控え柱を立てその上にやや小さい切妻屋根を載せる。四本柱に大きな屋根を架けた薬医門を簡略化したもの。豊臣秀吉の時代に城門として造られ始めた。控え柱の屋根を小さくする事で守備側の兵の死角を減らす意図があった。城の正面出入口である大手門を高麗門とする例が多い。江戸時代には神社や寺の門にも広く使われた。

構 (かまえ) : 防御のために設けられた区画のこと。曲輪 (くるわ) と同様の意味を持つ事もある。総構 (そうがまえ) に使われる事が多いが、城下町を含めて全体の区画を土塁や堀などで囲むこと、惣曲輪 (そうくるわ) の意味である。また造りや構造を指す場合もある、外観の事を「城構え」と言ったり、小さい城を「構えが小さい」などと言う。

対城 (たいのしろ) : 城攻めの時に相手の城の近くに築く臨時の城の事。向城、付城、などと同じ意味。小田原攻めの際に秀吉が構えた石垣山城など。

寺勾配 (てらこうばい) と宮勾配 : 石垣の勾配のこと。お寺と神社の屋根の形に由来する。弓状の曲線を描き、上にいくほど反り返りが急角度になるのが寺勾配、外側のラインが直線的なのが宮勾配。野面積みの場合はほとんど宮勾配で敵が登りやすく防御力が低いといわれている。

根小屋 (ねごや) : 山城の麓に建てられた屋敷や館の群れを意味する。根古屋、寝古屋とも書く。山の頂上に築かれる山城では曲輪の広さが限られるので、城主や家臣達の住まいを山の麓に置くようになった事も根小屋が発展した理由と言われる。

曲輪 (くるわ) : 土地の一定範囲を平らにして区切った所で、土塁や堀、石垣などで区画する。主な曲輪には中心になる本丸や本丸を守る二の丸、三の丸などを築く。

井戸曲輪 (いどくるわ) : 井戸や溜池などを有する曲輪のこと。水の手曲輪とも言う。

山里曲輪 : (やまざとくるわ) : 軍事的な目的を一切持たずに造られた曲輪のこと。曲輪内に茶室や庭園などが設けられた。織田信長の安土城が起源とする説がある。兼六園や岡山の後楽園は山里曲輪であったと言われる。大坂城にあった山里曲輪は千利休が造営した茶室を含む閑静な場所であったと伝わる。

横矢 (よこや) 掛かり : 侵入する敵に対して側面から弓矢や鉄砲などで攻撃するための防御設備。城堡の一部を屈折させたり曲輪を設けたりして横矢をし易くする。出入口となる虎口 (こぐち) に多く採用された。「よこやかがり」ともいう。凹みを付ける「折」を基本に出角 (ですみ)、入角 (いりすみ)、屏風折 (びょうぶおり)、角落 (すみおとし)、歪 (ひずみ) などいくつかのパターンがある。他に墨壁に二つの張り出し部分を造り両サイドから横矢を仕掛ける合横矢などもあった。

参考資料

- ・日本の城 DVD コレクション 1 姫路城 デアゴスティーニジャパン
- ・歴史人 No.101 戦国の山城 大全 KK ベストセラーズ
- ・歴史 REAL 足利将軍 15 代 洋泉社 MOOK
- ・歴史 REAL 関東戦国 150 年史 洋泉社 MOOK
- ・「平塚市 真田城とその時代」 平塚市博物館 栗山雄揮 埋文講座
- ・ウィキペディア 関東管領 古河公方 小机城 茅ヶ崎城他